

◇ 6月の天文暦 ◇

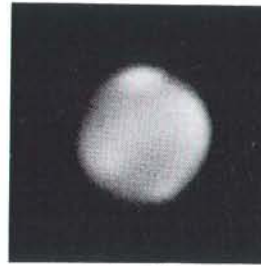
日時	記	事
3 11	月	最遠
6 19	芒種	(太陽黄経 75°)
8 14	朔	
12 0	入梅	(太陽黄経 80°)
12 19	水星	東方最大離角 24°
15 20	上弦	
17 12	火星	月の南 2° 通過
19 5	月	最近
21 9	金星	東方最大離 45°
22 11	夏至	(太陽黄経 90°)
22 14	望	
26 2	水星	留
30 4	下弦	
30 12	土星	月の南 0°4 通過

惑星めぐり (5) — 火星の表面気圧

2年2カ月ぶりの火星の接近が又やって来た。今回は4月16日が衝、4月22日が最近である。最近のときには距離が0.6012天文単位、視直径が15.57"となる。大接近のときの視直径25"に較べるともの足りないが、前回(1965年3月)の14"よりはだいぶ大きくなる。火星の季節は南半球の冬から春にかけてであり、極冠の変化、雲の動き等興味につきないものがある。

最近 Spinrad 等 (Ap. J., 146, 1966) は炭酸ガスの 5 μ ₃ バンドのスペクトル線の解析から表面気圧として 28 mb の値を得た。これより先 Kaplan 等 (Ap. J., 139, 1964) は同じスペクトル線から表面気圧 25 mb を東京における日出入および南中 (中央標準時)

VI月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分		時分		時分	時分
1	3 50	4 27	+27°9	11 39	76°2	18 51	19 27
10	3 47	4 25	+29.4	11 40	77.3	18 56	19 34
20	3 47	4 25	+30.0	11 42	77.8	19 0	19 38
30	3 50	4 28	+29.7	11 44	77.6	19 1	19 39



1967年3月19日
16^h50^m U.T.
Blue-filter
上が北



1967年3月19日
16^h50^m U.T.
Red-filter
上が北

得ており、Hanst と Swan (Icarus 4, 1965) は、Kaplan 等の data を異なった line strength をもちいて解析し、51 mb の値を得ている。従来認められていたのは Dolfus が偏光観測より得た 83 mb である。これは大気分子散乱の強さより求めたもので、blue haze を構成する散乱微粒子を考慮するともっと低く (約 50 mb) なるとおもわれる。それにしても Spinrad 等の得た値は、従来のものに較べてひどく小さいといえる。『大気が薄いために、地球の成層圏のような輻射平衡が地表近くでなりたち、温度は高さに対してはほぼ一定となる。そのため風のよく当る高地では霜が溶け易く、風の当たらない低地では霜はとけ難い、従って極冠の後退の際にとり残される白い点は、今まで考えられていたような高地ではなく、むしろ低地と解釈される』といった考え方 (Sky & Telescope, 32, 1966) も提出されている。

Mariner のような飛行物体を飛ばして実際に測定すれば、問題の解決は得られるであろうが、ここ当分は火星の表面気圧は興味深い問題である。(鳴海)

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日の出、右側は日入に対する値)

分	分	分	分	分	分
鹿兒島 +48	+26	鳥取 +24	+21	仙台 -11	+3
福岡 +44	+31	大阪 +20	+14	青森 -19	+12
広島 +33	+26	名古屋 +14	+10	札幌 -29	+17
高知 +32	+19	新潟 -3	+9	根室 -47	+2

